

大学生の学びの質と自己効力感との関係の検討 — 学びの質に関する探索的研究 (1) —

皆川直凡 (鳴門教育大学大学院)

問題と目的

大学全入時代を迎え、学習者、とりわけ大学生の学びの質が問われている。高校生の頃までに自律的な学習習慣が身につかず、自律的な学習が困難な学生が増えているともいわれている。本研究では、大学生の学ぶ意欲および学び方の傾向を彼らの自己効力感とあわせて測定し、両者の関係を検討することをとおして、大学生の学びの質とその問題点を考察する。将来的には、大学生を自律的な学習者へと導く教育方法の開発へと結びつけることを研究目的とする。

方法

研究協力者 大学 2 年生対象の「教育心理学」の受講者 102 名が研究協力者となった。この中には、3 年生と 4 年生がそれぞれ 3 名含まれていた。

測定尺度と手続き 上記授業 (半期 15 回) のうち 5 回にわたって行われた学習領域の授業の最終回に、学習者としての自己を省察する時間を設定して、学習時の行動尺度、特性的自己効力感尺度 (成田ら, 1995)、学ぶ意欲と学び方の傾向尺度の順に実施した。その後、これらの尺度の評価方法を教授した。尺度の実施と評価方法の教授に要した時間は、全体でおよそ 40 分間であった。

結果および考察

学習時の行動尺度は、話す、聞く、書く、関心・態度の各下位尺度から成ることから、下位尺度別の平均値と標準偏差を算出し、Table1 に示した。

Table1 学習時の行動尺度の記述統計量

	平均	標準偏差
話す	7.60	1.765
聞く	8.48	1.633
書く	8.44	2.132
関心・態度	6.56	1.927

各下位尺度について 3 項目あり、4 段階評定のため、評定値は 4~12 に分布することから、平均評定値の満点に対する比率は高い順に、「聞く」70.7%、「書く」70.3%、「話す」63.3%、「関心・態度」54.7%となった。下位尺度を要因とする 1 要因分散分析の結果、主効果が有意となり ($F(3, 303)=37.533, p<.001$)、授業を聞き、ノートをとることに専心し、自ら考え、表明すること

はあまりせず、関心・態度は高くないという、やや受動的な学習者としての傾向がうかがえた。

学ぶ意欲と学び方の傾向尺度のうち、学ぶ意欲を測定する部分は、追求重視、向上重視、活用重視 (ここまでは、学習内容重視)、勝敗重視、関係重視、褒賞重視 (これらは、他者・条件重視) の各下位尺度、学び方を測る部分は、関連・発展、確認・改善、練習・記憶の各下位尺度から、それぞれ成ることから、下位尺度別の平均値と標準偏差を算出し、Table2 に示した。

Table2 学び意欲と学び方尺度の記述統計量

	平均値	標準偏差
追求重視	9.28	1.662
向上重視	8.22	1.847
活用重視	8.81	1.748
勝敗重視	7.53	2.076
関係重視	7.21	2.273
褒賞重視	8.38	1.832
関連・発展	8.06	1.743
確認・改善	8.07	1.557
練習・記憶	8.37	1.713

前述の学習時の行動尺度と同様、評定値は 4~12 に分布することから、平均評定値の満点に対する比率は高い順に、「追求重視」77.3%、「活用重視」73.4%、「褒賞重視」69.8%「向上重視」68.5%、「勝敗重視」62.8%、「関係重視」60.1%となった。

特性的自己効力感尺度の平均値は 67.61、標準偏差は 11.695 となった。この尺度は 23 項目であり、5 段階評定のため、評定値は 23~115 に分布することから、平均評定値の満点に対する比率は 58.8%となり、やや低い。自己効力感と学習時の行動との相関係数は、「話す」.405、「聞く」.276、「書く」.398、「関心・態度」.413 となり、いずれも統計学上有意であった。自己効力感と学ぶ意欲との相関係数は、追求重視.339、向上重視.310、活用重視.275 (統計学上有意) となり、学習内容重視の傾向との間に相関が認められた一方、他者・条件重視 (勝敗重視、関係重視、褒賞重視) の傾向との間の相関係数は低く、統計学上有意とならなかった。本研究の結果、自己効力感が低く、他者・条件重視の傾向の高い学生も相当数存在することから、対応策の必要性が明らかとなった。